

武部 勤

元戦後五〇年問題プロジェクト 慰安婦問題等小委員会委員長



たけべ つとむ
1941年北海道斜里郡斜里町生まれ。早稲田大学卒業。自由民主党入党。71年北海道議会議員。86年衆議院議員。95年三党プロジェクト慰安婦問題等小委員会委員長。2004年自民党幹事長。

わりということについては、何か特別なご経験が
おありになりますか。

武部 いや、私は北海道の出身ですから、被災者という立場は経験ないんです。ただ、室蘭の製鉄所で働いていました父に召集令状が来て、二回応召しましたので、母は一人で私と弟を育てなきゃならなかったんですね。室蘭にいるときに、空襲を経験しています。真つ赤になった空が記憶にあります。そして、母が乳飲み子の弟と僕を連れて、

騒然とした中で、防空壕へ飛び込んだということですね。何かそのときの母の話を聞いて、なるほどなと思ったことが記憶に残ってますね。

それから、母が汽車で僕を連れて、満員の列車に乗ったとき、僕がおしっこしたいというので、みんながリレーして、トイレへ運んでくれたというのです。母の自慢話なんです。僕は誰からもかわいがられて、どんな怖いおじさんの顔見ても泣きもしないで、にこにこしている。

戦争体験、代議士になるまで

和田 アジア女性基金のオーラルヒストリー・プロジェクトにご協力いただくことになりました、ありがとうございます。

はじめにご経歴からうかがわせていただきたいと思います。先生は昭和一六年のお生まれでございませぬ。戦後に学校にお入りになられたわけですが、戦争とのかか

みんな息が詰まるような列車の中で、僕のことです。笑いを誘い、気分が和んだ。それでおしっこさせてもらったんですよ、そんな話を母はよくしますけど、私は戦争そのものの体験はありません。防空壕に入ったとか、空襲で焼かれて真つ赤に燃え盛っているのを高台の家の近くで見てたということがあるだけです。

和田 そういう記憶をもっておられる最後の世代ですね。

武部 最後の世代です。父が戦地から帰ってきたとき、カパンをもらって食べたという記憶があります。まあ、どここの家庭もそうだったでしょうけど、母は、収入がない間は洋服の仕立て直しをやったりして、生きていくためには大変だったのです。ただ、北海道ですから、食べ物に余り苦労しなかったんじゃないのかな。父が帰ってきてから、父は中華職人で、うちの裏に豚を飼ったり、鶏を飼ったりして、そのえさを僕がやっていたり。畑もつくっていました。鉄道の寮にいたんですが、父は料理がうまいから、みんなに喜ばれていました。それで、その鉄道のおじさんと一緒に機関車に乗せてもらったりして、昔はのんびりしてました。途中で降ろしてもらって、山へ入ってブドウをとりに行ったりね。

和田 そうすると、ずっと北海道で、大学は東京へ行かれたわけですね。

武部 そうです。小学校、中学校、高校と、斜里でした。

和田 大学をお出になつてから、どうされたのですか。

武部 僕は昭和三九年春早稲田大学の第一法学部を出て、まっすぐ三木武夫先生が主宰する中央政策研究所に入りました。ちょうど東京オリンピックのときです。三木武夫先生のところに六年間勤めて、それから地元へ帰って、北海道議会議員選挙に出ました。そのとき応援してくれたのが中川一郎先生です。そして中川先生がああいう非業の死を遂げた後、渡辺美智雄先生に拾われたのです。

戦後五〇年プロジェクトにて

武部 私は正直に言いますと、村山首班指名に造反したわけですよ。

和田 そうでしたか。

武部 それまで交通部会長をやっていたんですが、その造反で役職をやめることになりました。三カ月たって、渡辺美智雄先生のお伴でベトナムに行つておりました時に、山崎拓先生から電話が来て、内閣部会長をやれと言っていますね。それで、渡辺美智雄先生から「おまえ、内閣部会長というのは、カウンターパートは内閣総理大臣だぞ。これはいいから受けた方がいい」と言われて、それで内閣部会長を受けることになり、日本についたその日に初会合があったんです。

和田 戦後五〇年プロジェクトですか。

武部 そうです。戦後五〇年問題プロジェクトはもう動いていたので、僕は途中から入りましてね。虎島さんが戦後五〇年問題プロジェクトの座長になったので、内閣部会長をやめたんですね。その後任となつて、自動的に戦後五〇年プロジェクトのメンバーにもなったのです。

和田 なるほど。

武部 虎島和夫さんと私は親友中の親友で、今年亡くなつてお葬式にも行ってきましたけど、虎島さんが総務政務次官をやっているときに、僕は北海道開発政務次官で、同期の桜でした。初当選したときに、二人で手をつないで初登院一番乗りをやつたんですよ。

和田 そうでしたか。

武部 戦後五〇年プロジェクトの最初の会合で「被爆者援護法」のことが話題になりました。当時は自民党・社会党・さきがけ、三党連立政権ですからね、社会党さんたちは余り与党の経験がないものですから、どっちが野党で、どっちが与党かわからん議論になつて、僕は黙つてたんですけど、最後にね、いまは村山政権ですよ、こういうふうにわからなくなつたら、村山総理大臣のご意向を伺えばいいんじゃないのかな、と言つたのです。そして、みんな「そうだ、そうだ」と言つて、それで五十嵐官房長官から翌日、談話が出まして、被爆者援護法の改正が決まつたんです。

和田 なるほど。

慰安婦問題小委員会委員長として

武部 そして、今度は「従軍慰安婦問題等小委員会」を設置するいうときに、たしか最初は、社会党の早川勝さんを小委員会委員長という話だったはずなんです。ところが、社会党は、この問題については、特に女性議員の中には厳しいご意見をお持ちの方も多いですからね。それでなかなか引き受けられないので、座長の虎島先生が僕に小委員長をやれと言われました。

和田 なるほど。

武部 もう、無理だと言つたんですけど、委員長というのは、みんなの意見を聞いて、さばけばいいんだというこゝとで、引き受けさせられたのです。だけど、会議は随分やりましたよね、一〇回以上やりましたか。

和田 社会党は竹村泰子さんですね。

武部 そう、竹村さんと、もう一人、オブザーバーで参加してた人がいるんですよ。

和田 清水澄子さんです。

武部 清水さんは一度部屋から出ていつてしまったこともありますしね。

和田 激論がありましたか。

武部 そうですね。まあ激論はありましたが、やっぱり資

料をよく集めて、それをみんな、素直に読んで、そして、そういう事実に基づいてまとめたということなんです。

いわゆる従軍慰安婦の問題について言うならば、数多くの慰安婦の存在があつたということは認める、その実態についても、当局が関与していたことも明らかになつてきた、だから従軍慰安婦としていやしがたい傷を負われた女性に対して、この際、心からおわびと反省の気持ちを表す必要がある、というわけです。これは村山談話でも明らかにされていきました。

国際法上、外交上は、政府は誠実に対応しているということも明らかになりました、しかし、賠償とか、補償とか、請求権の問題とかは、サンフランシスコ条約と二国間の条約で解決済みである。実際、経済協力という名のもとに賠償もやってきたわけです。国によつては、日本と当該国との間の問題は当該国の国内問題として残つているものもありましたね。また、そのところを理屈っぽく、こうしたじゃないか、ああしたじゃないか、それは国内問題じゃないかと言つてしまえば進まないもんですからね。戦後五〇年を経た今、いやしがたい傷を負われないわゆる従軍慰安婦の方々に対して、心からおわびと反省を表すとして、この責任は政府だとか、特定の者が責任を負うというのではなくて、国民が分かち合う、道義的な責任という観点から、国民がみんな責任を分

かち合うということでも基金をつくり、募金をして寄附を募ろう。そういう気持ちで基金をつくつて、きちつとした償いの事業をやりましょうということになったのです。それと、未来志向で、二度とこういうことが起こらないようにという、そういう啓蒙普及も大事なので、それには、現実的に、今なお、児童買春だとか、女性が同じように傷つけられているという問題がこの世界からなくなるようにするといふ今日の課題にもとりくむ、そういった人たちに對しても手を差し伸べるという、二つの事業を行うというスキームだったと思いますけどね。政府としては、なかなか金の出し方は難しかったんですけどもね、いろんな知恵を出して考えました。

和田 まあ、本当によく決断なさいましたね。

武部 そのうちに、第一次報告書というのをまとめることになりました、その文書原案を僕に書けということになりましたね。それを書くときに問題になったのが「国家責任」という言葉なんです。それで、僕は「国家責任」というのは、随分、表現としては前時代的に聞こえる。「国の責任」ではだめですかと言つたら、「国の責任」でもいいと。それじゃ、どこに、どのように挿入するかは任せてくださいということ、私は「道義を重んずる国の責任を果たすことによつて」という文章にしたんですけど、大分怒られましたね。

和田 「我が国及び国民の過去の歴史を直視し、道義を重んずる国としての責任を果たすことよって」というくだりですね。

武部 そうですね。

和田 先の方には、「我が国としては、道義的立場からその責任を果たしていかなければならない」ということもありませぬ。

武部 そのところがちよつと苦労したところですね。

和田 そうですか。

武部 大分みんなで喧々諤々やりましたよ、最後、文章が一貫してなければだめだというので、私に書き上げることを一任してくれました。それで、また書いたものをみんなです直しして、怒られもしましたけどね。

めぐりあわせというか、おもしろいですね。私は村山さんに一票入れなくて交通部会長をクビになって、内閣部会長で復帰して、そして村山総理に協力するという「戦後五〇年問題プロジェクト」のメンバーになって、私が従軍慰安婦問題小委員長に就任して、この第一次報告を出したわけですから。

第一次報告書ということも、私がまとめる一つの案として、まず、ここで第一次案としてまとめましょう。さらに入れる議論があるんだから、それは第二次案としてやることのできるじゃないですかと言ったのです。全体

の合意を取りつけるために。

和田 合意をとりやすい形ですね。

武部 そういう案を、ちよつと私がひねりまして、まとめたという、そういう記憶がありますね。

アジア女性基金への貢献

武部 基金のために僕が働いたのは三木睦子さん呼びかけ人になるように口説いたことです。何かの会合があったときに、ホテル・ニューオータニに来るといって、そのときに会おうということをお願いしました。私はホテルの部屋をとりました。ちゃんと次の間のある部屋を取りまして、ホテル代は私が払いました。それで一時間半ぐらい話したんだけど、なかなか「うん」と言ってもらえない。そのうちに、三木夫人は「私、五十嵐広三さんという人が好き」だと言ってますよね。これがサインだなと思って、帰ってきて、五十嵐官房長官に「お会いしてください」と言った。それで、こういうときは元総理の奥様に官邸に行ってもらうわけにいかないので、大変失礼だけど、南平台の三木邸まで足を運んでくれないかと頼みましてね、そして呼びかけ人になってもらった。これも私が関与した一つですね。

和田 そうでしたか。なるほど、そうですね。

武部 こういうことは村山内閣でなければできなかつたで

しようね。

和田 でも、宮沢内閣で、はじめたことでしょう。

武部 ええ、宮沢内閣で、下地はできてたんです。

和田 かたちはおつくりになりましたからね。

武部 ただね、こういう問題は、与野党が一緒になつてね、国民的な呼びかけをするという、日本赤十字も絡んでましたね。

和田 そうでしたね。

武部 公益事業をやっている、そういったところを窓口にしてやろうと、かつて議論になりましたでしょう。やっぱりこの種の問題は、国会でも全党挙げて一致するということが大事ですから、確かに宮沢内閣のときも河野官房長官談話もありましたし、下地はできていた。問題提起されてから相当長い時間かかって、自社さ政権になって、みんな一緒になった。だから、できたのだと思えます。あれは自民党内閣だったら、社会党が果たして賛成したかどうかという感じもしますよ。特に国家責任の問題がありますから。また、社会党がよく、日本政府は国際法上も外交上も誠実に対応してきたと認めましたね。そういうことについて、随分喧々諤々やりました。それで、その後もいろいろと着実に事業が進んで、インドネシアが最後ですかね。

和田 インドネシアの、今高齢者施設を建てているのが最

後です。来年の三月には終わります。

アジア女性基金を評価する

和田 アジア女性基金は創立以来、一二年ほどたちまして、もうこれで終わっていくわけですが、アジア女性基金の活動はよかつたと評価されますか。

武部 非常に評価されるべきだと思いますね。これは、これからのいろいろな問題を解決していく上で、非常に説得力のある一つの方式だと思います。つまり、国家間にあっては、いろいろな主張があるわけです。日本は日本の主張、それから仮に中国なら中国の主張。それにはそれぞれの根拠を持って主張するわけですね。何事も平行線で終わらせてはいけないと思うんです。特に、歴史的な認識のことは一〇年前と一〇〇年前と変わってくるわけですね。だから、なかなか歴史的検証って難しいと思うんです。そのときに、歴史的な検証は、さらに続けましょう。だけど、今ある問題、北方領土の問題なんかも似てると思いますよ。対象者がどんどん高齢者化していく、そういうときに平行線のままでいいのか。やっぱりお互いに受け入れ可能な解決策というものを模索する必要があるんじゃないかと思えますね。

その一つの例として、このことの評価というのは、私どもがこのことに携わってきたからいいとか悪いとかと

いうような自己評価は控えるとしても、やっぱり対象にある人たちが高齢化していくのに対する対応については、いろんな意見がある、時間かけてばかりいられないというときに、みんなで知恵を出すという一つの道を選んだということとは、私はよかったですと思いますね。で、客観的にも評価されてるんじゃないでしょうか。

和田 ええ、そうだと思います。

武部 国には、いろんなメンツがあったり、事実認識がそれぞれ違う場合がありますから、現実に置かれている事実を直視すると思いますかね、その原因がどうだとかというよりも、今こういう問題があるということを確認するということから、どうするかということですね。

それから、僕、思うんですけど、日本をもつと寄附社にしたいと思うんですよ。環境とか、あるいは文化、スポーツとかね、それから、いろんな介護のこともありましようし、いろんな分野でね。これからの時代というのは、国民は税金を納める義務だけじゃなくて、やっぱり人間として今元気であるならば、その元気でない人たちに元気を与えるとか、提供するとかを考えなければいけませんよ。われわれは、単に今までは手段がないから税金として納めているんでしょうけれども、労力奉仕だとか、お金のある人はお金を、時間がある人は時間を使うという、そういうボランティアが重要です。

アメリカでは、コンピューターのビル・ゲイツなどの話を聞くと、お金をもうけるのは、自分の夢を実現するため、その夢の実現は社会事業だとか、社会奉仕だとかなのだということです。そういう意味で、アジア女性基金は、みんなで分かち合って、こういう問題解決に努力するということの一つの模範的な例じゃないでしょうか。

僕は、当時は学者の先生というと、何か一人よがりな自説を持って曲げない人たちという先入観を持ってたんですけどね、和田先生たちから話を聞いて、イメージが変わりました。恐らく先生方も、政治家という一種独特の偏見を持ってたんじゃないかと思うんですけどね。

和田 これは、やはり政府と市民とが協力してできた珍しいケース、重要なケースであったと思いますね。

武部 これから、そういうことを多くしていかなくちやいけませんね。

和田 そうですね。おっしゃるとおりです。

武部 国民一人一人が、特に、これから団塊の世代もたくさん出てくるんで、そういう気持ちを持つてる人いっぱいいるんですよ。

和田 幹事長として大変お忙しいところ、ありがとうございます。

(二〇〇六年九月四日、自由民主党本部にて)